

Title	『オセロー』試論：知性と情動
Author(s)	山津, さゆり
Citation	Osaka Literary Review. 29 P.117-P.128
Issue Date	1990-12-20
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25440">https://doi.org/10.18910/25440</a>
DOI	10.18910/25440
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 『オセロー』試論

——知性と情動——

山津 さ ゆ り

## I

『オセロー』という悲劇ほど、主人公に対してもどかしさや不満を抱かせるものはないかもしれない。これまでの『オセロー』批評において、主人公オセローの愚かさがしばしば指摘された。観客や読者の大部分も、オセローに対して苛立ちや怒りを感じるであろう。

しかし、私は『オセロー』という悲劇をこのように第三者的に見て、もどかしさを感じているだけでよいのかどうか疑問に思うのである。誰もがオセローのようになってしまう可能性をもっているはずである。人間は常に第三者的に知性的であり続けることはできないはずである。知性では割り切ることのできないのびきならない状況に陥ってしまうことがあり得る。知性でなかなか理解しにくい情動的なものが人間の生活において無視できない位置を占めている。『オセロー』という悲劇においては、この情動的なものを重視する必要があるように思われる。この小論では、このような観点に基づいて、ハンカチの問題、知性と情動の問題、そしてオセローの墮落と回生の問題について論じてみたい。

## II

オセローは、第三幕第四場でハンカチの由来と神秘性を次のように語っている。

That handkerchief  
Did an Egyptian to my mother give:  
She was a charmer and could almost read

The thoughts of people. She told her, while she kept it,  
 'Twould make her amiable and subdue my father  
 Entirely to her love ; but if she lost it  
 Or made a gift of it, my father's eye  
 Should hold her loathèd and his spirits should hunt  
 After new fancies . . . .

There's magic in the web of it :

A sibyl, that had numbered in the world  
 The sun to course two hundred compasses,  
 In her prophetic fury sewed the work ;  
 The worms were hallowed that did breed the silk,  
 And it was dyed in mummy, which the skilful  
 Conserved of maidens' hearts. (III. iv. 51-9, 65-71)<sup>1)</sup>

デズデモーナは、オセローの武勇談を聞いて、自分もそのような男性に生まれていればよかったのと思うほど彼の話に興味を示し、彼を受け入れるに至ったのだが、上に引用したハンカチの話に対しては、共感するどころか驚愕と恐怖の念に襲われるのである。彼女の“'I'faith, is't true?” (III. iv. 71) や“Then would to God that I had never seen't!” (III. iv. 73) という台詞は、彼女がオセローのハンカチに対する思い入れを共有し難いものだと感じていることを顕著に示している。彼女はハンカチを失くしたことで恐れているというよりはむしろ、オセローのハンカチに対する思い入れが尋常でないことに恐れを抱いているのである。デズデモーナは、オセローからもらったハンカチを大事にはしていたが、これほどの思い入れのあるものだとは夢にも思っていなかったにちがいない。

オセローとデズデモーナとの間の愛は、たとえ第三者には理解し難いものであるとしても、二人の間ではお互いを惹き付ける何かがあったからこそ愛が芽生えたのである。年齢の差を越え、膚の色の違い、慣習の違いをも越えて愛し合った二人だが、オセローのハンカチに対して抱いている激しい情動は、デズデモーナの共感を阻む、あるいはむしろ、拒絶してしまうほどのものであった。愛のように、少なくとも二人の間では共有できる

情動もあれば、他者には共有できないあるいは他者が共有したいと思わないような情動もあるのである。どういう情動であれ、知性的、理性的には理解し難いのである。オセローのハンカチは、他者に共有され難い情動の象徴、あるいは「私的幻想」<sup>2)</sup>の象徴として読み取ることのできるものであるように思われる。

ハンカチに関わる場面を重視して十分に論じている批評家はあまり多くないようであるが、ここで注目すべき批評家の分析を見てみたい。

Arthur Kirsch は、オセローの台詞の中で言及されている母親というものに着目してオセローの幼児期にまで溯り、幼児と母親の一体化と母親による裏切りという精神分析的理論を展開している。そして、オセローの母親の形見であるハンカチそのものが、裏切りという原初的な問題を孕んでいるとし、デズデモーナによって裏切られたというオセローの嫉妬に満ちた妄想をそこに還元させて説明しようとしている。<sup>3)</sup>

また他の批評家、Harry Levin は、オセローのハンカチを愛の誓いの印以上にもっと深刻なものであるとしている。つまり、そのハンカチが、生死あるいは運命を左右するほどの魔術的な力をもっているということを強調しようとしている。<sup>4)</sup>そして、結果的にも、二人に破滅が訪れることになってハンカチが運命を左右したのだと、Levin は続けて述べている。<sup>5)</sup>

Arthur Kirsch は、オセローのハンカチに幼児期の母と子の愛と裏切りの問題を見出し、Harry Levin は、ハンカチの魔術性と運命のもつ抗いがたい力とを結びつけた。これら二つの分析はそれぞれ傾聴に値するものであるが、どちらもオセロー以外の人間にもあてはまり得るような分析をしているように私には思われる。私は、オセローのハンカチに対する思い入れはオセローに特有のものだと考えたい。つまり、ハンカチの由来を語っているオセローの台詞を理性や知性では理解し難い彼の内面の世界、いわゆる「私的幻想」の世界の表象として読みたいのである。

特に、ハンカチの神秘性が語られている部分には、彼の「私的幻想」が一層強烈に現われている。その強烈さには驚かざるを得ない。二百歳にも

なる巫女や、神聖な蚤、乙女のミイラの心臓から取った調合薬で糸が染められたことなど、どれも常人の想像を絶するものである。オセローの話の真偽はどうであれ、ハンカチに対する彼の思い入れ、あるいは感情の激烈さは驚くべきものである。彼がハンカチに抱いた感情は、他者の理解の域を越えたものなのである。

Martin Elliott は、その台詞を “a notable piece of wife-frightening” としてオセローがデズデモーナを怖がらせてハンカチの権威を威圧的に知らしめようとしていると述べている。<sup>6)</sup> 結果的には、既に述べた通り、デズデモーナが恐怖感を抱いたことは否めないが、オセローが意識的にハンカチの権威を押しつけようとしたとか、デズデモーナを怖がせたという考えには同意できない。ムーア人とヴェネチア人という文化的違いを乗り越えて愛し合ったデズデモーナでさえ恐れおののかせるほどに、オセローのハンカチに対する思い入れが激しく、他者の共感を拒むようなものであるということに着目すべきであるように思われる。

始めに述べたように、この劇において情動的なものを重視する必要があるが、オセローのハンカチは他者の感情移入を許さないような情動の象徴としての重要な役割を果たしていると言うことができる。

### III

イアーゴの企みに引っ掛かってデズデモーナに対して嫉妬の炎を燃やし、挙句の果てには殺害にまで及んだオセローを愚か者とし、彼に対する苛立ちを隠しきれない批評家あるいは観客、読者がいるということは冒頭でも述べた通りである。たとえば、Albert Gerard は、オセローの行為は彼の “obtuseness” に基づいているとか、<sup>7)</sup> “Othello’s lack of intellectual power is the basic element in his character.”<sup>8)</sup> と述べている。しかしながら、イアーゴのような人間に攻められれば、どんな知力のある人間でも耐えることができないであろうと思われる。

むしろ、オセローを唆したイアーゴの知性の性質を問題にすべきであ

と思う。ここでイアーゴアの台詞を少し取り上げて、彼の知性の性質について考察してみたい。

彼は、第一幕第三場において、ロダリーゴアに人間の意志を庭の比喩を用いて説明する (II. 313-9)。このイアーゴアの台詞について、Norman Sanders は、次のように指摘している。

Such a style is intellectually generated ; it is ingenious speech —— the result of a conscious calculation of effect rather than an instinctive utterance springing unbidden from the subconscious.<sup>9)</sup>

Sanders が言っているように、庭の比喩を用いたイアーゴアの台詞は、確かに知性に基づいたものではあるが、非常に抜け目のない感じで、計算に計算を重ねて効果を狙ったものである。彼の言葉は、心の底から湧き出てくるものではなくて、勘定高く、打算的なものである。全体的にイアーゴアの台詞にはそのような特徴が見られる。彼は終始他人を騙すために言葉を巧みに操作している。

もう一つ彼の台詞を見てみたい。これもロダリーゴアに言っているのだが、“Thou know’st we work by wit and not by witchcraft, / And wit depends on dilatory time.” (II. iii. 337-8) という台詞がある。イアーゴアは、ロダリーゴアに、彼らが進めている計画、つまりデズデモーナを手に入れるという計画に必要なものは“witchcraft”ではなくて“wit”「知性」なのだと言っている。これは、彼がいかに自分の知性に自信をもっているかを示している。彼の企みには、偶然が作用する隙が無いほどに、彼の知性が縦横無尽に働いているのである。ここには、彼の傲慢さが見られる。

また、引用したイアーゴアの台詞から、企みにじっくり時間をかけることを厭わない、抜け目のないイアーゴアがうかがわれる。さらに、この場合、計画の速い進行を催促してきたロダリーゴアをごまかすために、巧みに言い抜けようとしているずる賢いイアーゴアの姿も察することができる。ここでは、彼は“dilatory time”のことを重視しているが、他方では、

“Dull not device by coldness and delay.” (II. iii. 353) と言っているように、すぐさま計画を実行に移すことが大事だと考える。彼は、まことに機を見るに敏であり、臨機応変の処置をとる。

このように、イアーゴの知性は、打算的で手ぬかりのないものである。知性にも、高尚なものもちろんあるが、イアーゴのもっている知性のように、下劣な知性もある。シェイクスピアは、イアーゴを通して下劣な知性を厭と言うほど描いて見せているのであるが、これは、一種の知性の戯画化と言ってもよいかもしれない。最高の英知をもってしても、情動的なものを理解することはできないかもしれないのに、イアーゴのような卑劣な知性では、美しい情動の現れも理解されるどころか破壊されてしまうのである。

オセローとデズデモーナとの間の美しい情動の現れである愛に、イアーゴのような卑劣な知性が入り込んだのは、二人にとってまことに不運なことではあったが、二人の間の愛にも問題がなかったとは言えないかもしれない。二人の愛の形の違いというものが、問題であったように思われる。イアーゴのような卑劣な知性につけこまれば、この愛の形の違いは、二人の愛の破局へつながる危険性を秘めていたと言える。

それでは、次に二人の愛が、それぞれどのような性質をもっているのかを考察してみよう。まずデズデモーナの愛に関してであるが、それには家庭的で情け深いという形容がぴったりあてはまるように思われる。次に引用する台詞は彼女がオセローに対して、非常に家庭的なあるいは現実的な愛情を示している箇所であると言える。

Why, this is not a boon ;  
 ‘Tis as I should entreat you wear your gloves,  
 Or feed on nourishing dishes, or keep you warm,  
 Or sue to you to do a peculiar profit  
 To your own person. (III. iii. 76-80)

これは、デズデモーナがオセローにキャシオーのことを取り成そうとして

言った時の台詞であるが、彼女の愛情表現の仕方が世話女房的であることをよく示している。キャシオーを復職させようとするのも、彼女にとって、オセローの身の回りの世話をすると同じことなのである。Mikhail M. Morozov も上で引用した台詞を例に挙げて指摘しているように、デズデモーナには、“images of everyday domestic things”がある。<sup>10)</sup>

また彼女の最も情け深い愛情表現を示すものと言えば、息絶える直前の台詞を措いて他にはないであろう。

Nobody; I myself. Farewell.

Commend me to my kind lord. O farewell! (V. ii. 125-6)

デズデモーナは、オセローによって首を絞められて今まさに息絶えんとしているにもかかわらず、彼を許しすべての責任を我が身に負って自殺と偽るのである。Irving Ribner は、この台詞からデズデモーナの愛に関して次のように述べている。

The final words of Desdemona had been an assumption of Othello's guilt parallel to that of Christ for the sins of mankind . . . She stands from first to last as an incarnation of self-sacrificing love. <sup>11)</sup>

Ribner は、彼女の愛の性質を宗教的レベルに引き上げて、キリストの愛、自己犠牲的な愛に結びつけて考えている。こういう考えもできるかもしれないが、私は、デズデモーナの最期の行為は、平凡な主人思いの心優しい女性の成し得る、痛ましくはあるが、最も崇高な行為であると考えたい。

次にオセローの愛情表現の仕方を考察してみたい。第二幕第一場において、オセローがサイプラス島でデズデモーナと再会した際に言う台詞 (I. 174, II. 175-85) を見てみると、彼のデズデモーナに対する愛が、非常にロマンティックで激烈なものであることがわかる。John Bayley は、彼の愛は“masculine”であるとも言い、<sup>12)</sup> さらに“ It is of course as a possession, a marvellous and unexpected conquest, that he sees Desdemona.”<sup>13)</sup> と述べている。つまり、オセローの愛は男性特有の所有欲、征服欲に基づくという考えである。私もこの考えに賛成したい。



このように激しくロマンティックで、男性的なオセローの愛に対して、デズデモーナの愛は、既に述べたように、心優しく思いやりに満ち、家庭的である。この情動の性質の違いに、彼らの愛の破滅につながる危険性が潜んでいたのである。

情動を知性で理解しようとしてもなかなか理解しにくい、情動と情動の間にも共感されにくい面があり得るのである。

#### IV

オセローとデズデモーナとの間の愛は、オセローの中に嫉妬という情動が燃え上がり、破滅に至ることになる。オセローが嫉妬に狂って墮落していく様はすさまじいもので、それは彼の言葉の墮落によって表されている。彼の用いるイメージや言葉は、以前の高い調子のもとは一転して、下品で陰惨なものとなる。Mikhail M. Morozov も指摘しているように、オセローは、イアゴーが用いるような動物のイメージを多用するようになる。<sup>14)</sup>しかし、動物のイメージよりもっと着目しなければならないのは、オセローがデズデモーナのことを何度も“whore”、“strumpet”と呼んでいることであろう。“whore”や“strumpet”というような言葉は、決して口にしてはならないようなものであるはずである。

Emilia

Alas, Iago, my lord hath so bewhored her,  
 Thrown such despite and heavy terms upon her  
 As true hearts cannot bear.

Desdemona

Am I that name, Iago?

Iago

What name, fair lady?

Desdemona

Such as she said my lord did say I was.

## Emilia

He called her whore. A beggar in his drink  
 Could not have laid such terms upon his callet.

(IV. ii. 114-20)

この会話から、“whore”という言葉がいかに言うのを憚られるものであるかがよくわかる。デズデモーナは、その一語をどうしても口にすることができずに、“that name”や“such as she said”という表現で逃れようとしているのである。また、エミリアが言っているように、口が悪いはずの酔っぱらいの乞食でさえも言わないような言葉が、“whore”という言葉なのである。

オセローは、デズデモーナを殺害する場面でも、彼女を二度も“strumpet”と呼ぶ。嫉妬のような好ましくない情動も、知性的な面で割り切って、オセローの愚かさや信じやすさに原因を求めるべきではないと思うが、このようなオセローの墮落は許すべからざるものである。ただ、我々にとっての救いは、最後の場面で、デズデモーナを殺害した後ではあるが、真実を知ってオセローが本来の自分に戻ることである。

彼の最後の台詞 (V. ii. 334-52) に関して、T. S. Eliot は、オセローの“cheering himself up”のように感じられると述べている。<sup>15)</sup> また、F. R. Leavis は、この台詞を三つに分けて分析し、二つ目の部分、つまりオセローがはかられて嫉妬に狂い、大変貴重な真珠を投げ捨ててしまったことや、アラビアの樹から樹液が流れるように涙を流していることを伝えてほしいと語る部分 (ll. 341-7) に関して、それがオセローの“self-dramatization”になっていると指摘している。<sup>16)</sup> Eliot や Leavis は、オセローの最後の台詞にも、彼の欠点を見出そうとしている。

私は、オセローは劇の前半では威風堂堂としていて、台詞も威厳に満ちていたと思うが、今再びここで、それを取り戻していると思う。彼は、デズデモーナを殺して墮落の極みに至ったと言ってもよいほどであるが、かつてりっぱに生きていたことがあるという事実が、彼に最後にあのような

堂々とした台詞を吐かせているのである。James C. Bulman は、オセローの最後の台詞は公の場で自分の立場をはっきり述べるというヒーローの伝統に基づいているとしている。<sup>17)</sup> コンヴェンションをもち出さなくても、いざと言う時に公の場で、自分の非は認めながらも自分のしてきた良い事、自分の良い面をはっきり堂々と述べるができるということは、人間としてりっぱなことであると私は思う。コンヴェンションのヒーローとしての人間に限定するのではなく、広く人間一般についてこういう事が言えると私は思う。オセローはそのような人間の一つの例として考えることができる。

オセローは、第一幕第三場において元老院議員たちを前にして、デズデモーナとの結婚の事で申し開きをする場面で、自分がヴェニスのために戦場で全力を尽くしてきたことを堂々と述べるが、最後の台詞においても “I have done the state some service and they know't: / No more of that.” (V. ii. 335-6) と簡潔ではあるが明言している。この簡潔さが却ってオセローの自信の強さを語っているように思われる。

イアーゴは、オセローとデズデモーナの間の愛のような美しい情動には全く無縁な人間であり、男女の結びつきを肉体的にしかとらえられない。彼は、ブラバンショーに “an old black ram / Is tuppung your white ewe.” (I. i. 89-90) と告げる。彼はこのように下品極まり無い上に、真のすぐれた情動をもつことなく、人を色が違うことで軽蔑したり、他人を陥れようと陰でこそこそ動き回るような卑劣な人間である。このような人間には公の場で堂々と明言できるようなことは何もない。だから彼は最後に “From this time forth I never will speak word.” (V. ii. 301) と言って、口を堅く閉ざしてしまうのである。

## V

オセローが犯した罪は許されないとしても、彼を単に愚か者として片付けることはできない。最後の台詞で彼は、自分のことを “one that loved

not wisely, but too well” (V. ii. 340) と言っているが、私は “too well” という言葉に注目したい。彼はまことに激しく愛した人だったのである。嫉妬に狂って人間としてあるまじき罪を犯してしまったが、そのような激しい嫉妬も愛が激しすぎたためであるかもしれない。Helen Gardner も “The greater love is, the greater jealousy will be.” と言っている。<sup>18)</sup> オセローは、第三幕第三場で次のように言っている。

Perdition catch my soul  
But I do love thee ; and when I love thee not,  
Chaos is come again. (III. iii. 90-2)

愛さなくなれば天地創造以前の混沌状態が再びやって来ると言っているのである。自分の愛の激しさをこのような宇宙的規模の比喩で表すことのできる人がどれほどいるであろうか。しかも彼は、この表現が単なる大げさな比喩とは思われないほど実際に激しく愛したのである。

#### 注

- 1) Norman Sanders (ed.), *The New Cambridge Shakespeare : Othello* (Cambridge : Cambridge U. P., 1984), pp. 136-7.  
以下、『オセロー』からの引用はすべてこの版に拠る。
- 2) 岸田秀 『ものぐさ精神分析』(中公文庫, 1982), pp. 42-68.
- 3) Arthur Kirsch, *Shakespeare and the Experience of Love* (Cambridge : Cambridge U. P., 1981), p. 34.
- 4) Harry Levin, *Shakespeare and the Revolution of the Times* (New York : Oxford U. P., 1976), p. 158.
- 5) *Ibid.*, p. 159.
- 6) Martin Elliott, *Shakespeare's Invention of Othello* (Houndmills: The Macmillan Press Ltd., 1988), p. 33.
- 7) Albert Gerard, “ ‘Egregiously an Ass’ : The Dark Side of the Moor. A View of Othello's Mind’ (SS 10, 1957) in *Aspects of ‘Othello’ : Articles Reprinted From ‘Shakespeare Survey’*, ed. Kenneth Muir and Philip Edwards (Cambridge : Cambridge U. P., 1977), p. 13.
- 8) *Ibid.*, p. 14.
- 9) Norman Sanders, “Introduction” to *The New Cambridge Shakespeare : Othello*, p. 31.

- 10) Mikhail M. Morozov, 'Extract from "The Individualization of Shakespeare's Characters through Imagery"' (SS 2, 1949) in *Aspects of 'Othello'*, p. 27.
- 11) Irving Ribner, *Patterns in Shakespearean Tragedy* (London: Methuen & Co. Ltd., 1960), p. 112.
- 12) John Bayley, "Love and Identity: *Othello*" (1962) in *Shakespeare: 'Othello'*, Casebook Series, ed. John Wain (Houndmills: Macmillan Education Ltd., 1971), p. 181.
- 13) *Ibid.*, p. 182.
- 14) Morozov, p. 24.
- 15) T. S. Eliot, 'From "Shakespeare and the Stoicism of Seneca"' (1927) in *Shakespeare: 'Othello'*, Casebook Series, p. 70.
- 16) F. R. Leavis, "Diabolic Intellect and the Noble Hero" (1952) in *Shakespeare: 'Othello'*, Casebook Series, p. 141.
- 17) James C. Bulman, *The Heroic Idiom of Shakespearean Tragedy* (London and Toronto: Associated University Presses, 1985), pp. 123-4.
- 18) Helen Gardner, "The Noble Moor" (1955) in *Shakespeare: 'Othello'*, Casebook Series, p. 166.